



Yahoo!基金 2021年度 被災地復興調査助成プログラム

「ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」
事業実施報告書

YAHOO! 基金
JAPAN

「ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」は Yahoo! 基金の助成を受けて
一般社団法人子どものエンパワメントいわてが運営しています。

目 次

目次.....	1 P
1. 調査背景.....	2 P
2. 調査概要.....	2 ~ 5 P
3. インタビューで明らかになってきたこと	6 ~ 19 P
4. パイロット事業.....	19 ~ 20 P
5. いくつかの語りのスタイルと特徴.....	21 ~ 22 P
6. 次年度以降の展望.....	22 P
7. おわりに.....	22 P
付録 「語らいの場」開催マニュアル.....	24~25P

Yahoo! 基金 2021 年度 被災地復興調査助成プログラム 「ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」 事業実施報告書

1 調査背景

災害体験の語りは防災教育にとって必要不可欠である。それは、災害に対する十分な備えによって身を守った事例、備えの不十分さが引き起こした事例、災害発生時における対応の失敗事例や成功事例、これらを語りべが伝え、聞き手がそれを防災活動に取り入れることで、個人・社会の防災力の向上が見込めるからである。震災体験の語りが防災教育の質を高めていくと考えられる。

ユース語りべの語りは、被災当事者が自分の被災体験と向き合っていく中で、戸惑いや混乱、悲しみや辛さ、やしさしさや強い意志などいろいろな感情の揺れと向き合い、それを整理していくプロセスであると考えられる。本調査を通して、ユースによる語りが持ちうる上記の二つの力、つまり「防災教育力」と「心のケア力」を明らかにし、ユース語りべを含む多様な背景を持つ人々が参加する語らいの場の必要性について検討する。

2 調査概要

(1) 調査実施概要とパイロット事業

この調査研究事業では、東日本大震災の被災地で語りべを行う若者（ユース語りべ）を対象としたインタビューを中心に行った。ユース語りべに対するインタビュー方法においても十分に配慮するため、ユース語りべと長く接してきた専門家によって構成される専門家委員会を設けて随時議論を行った。以下（2）に示すのがインタビュー対象者、（3）に示すのが専門家会議のメンバーである。また全体の事業実施概要を時系列で以下の表に示す。

2021年	
10月27日	第1回 専門家委員会議 ユース語りべへの質問項目検討ワークショップ <ul style="list-style-type: none">・オンライン開催・参加9人（研究者・専門家4人、語りべ支援者2人、当法人関係者3人）・事業説明、インタビュー調査の方法と留意点の検討、実施日の検討
11月16日	第2回 専門家委員会議 ユース語りべへの質問項目検討ワークショップ <ul style="list-style-type: none">・オンライン開催・参加10人（研究者・専門家6人、語りべ支援者3人、当法人関係者1人）・経過報告、インタビューの基本方針の確認、第2回インタビュー（3月）の日程決定
11月27日	「ユース語りべ」オンライン活動報告会の実施 <ul style="list-style-type: none">・オンライン開催・参加11人（ユース語りべ6人、研究者・専門家2人、当法人関係者3人）・ユース語りべに対する本事業説明、語りべの活動報告と参加者のフリートーク、インタビュー項目の検討・精査
12月18日	「ユース語りべ」沼崎健さんによる語りべ活動 <ul style="list-style-type: none">・「防災学習実践研究会」でのオンライン講演と参加者との質疑、フリートーク・参加約30人

2022年

1月～4月	<p>第1回 対面でのユース語りべへのインタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1月 22日、23日 ・宮城県石巻市・女川町 ・インタビュー対象者5人 <p>第2回 対面でのユース語りべへのインタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3月 26日、27日 ・岩手県釜石市 ・インタビュー対象者4人 <p>オンラインによるユース語りべへのインタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3月 7日、13日、19日、21日、22日、24日、4月 20日、25日 ・インタビュー対象者9人 <p>対面およびオンラインを合わせて17名のユース語りべへインタビュー実施</p>
3月19日	<p>「ユース語りべ」高橋敦浩さんによる語りべ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「防災学習実践研究会」でのオンライン講演と参加者との質疑、フリートーク ・参加約 30人
5月14日	<p>「ユース語りべ」紺野堅太さんによる語りべ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「防災学習実践研究会」でのオンライン講演と参加者との質疑、フリートーク ・参加約 30人
6月3日	<p>「ユース語りべ」只野哲也さんによる語りべ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高知県黒潮町大方中学校 約 70名を対象 ・この語りべをきっかけに大方中学校と只野さんが所属する Team 大川未来を拓くネットワークとの交流がスタート。たとえば、大方中学校の生徒が大川小学校（震災遺構）で実施した「おかげプロジェクト」にメッセージを送るなど。
6月11日	<p>第3回 専門家委員会議 パイロット事業に向けた検討会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューの実施・内容報告 ・パイロット事業①の実施に向けた検討 ・ユース語りべの語りの解釈に関する検討と「語らいの場」の設定方法に関する検討・フリートーク
6月25日	<p>パイロット事業①</p> <p>震災ユース語りべ 語りが持つ心のケア「力」と防災教育「力」 報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン開催 ・参加 18人（ユース語りべ4人、研究者・専門家5人、語りべ支援者2人、一般参加5人、当法人関係者2人） ・事業説明 ・ブレイクアウトルームを使った「語らい」 ・「語らい」の共有と討論 ・まとめ
8月26日	<p>パイロット事業②</p> <p>震災ユース語りべ 語りが持つ心のケア「力」と防災教育「力」 拡大報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインと対面によるハイブリッド開催 ・参加 26人（ユース語りべ3人、研究者・専門家3人、語りべ支援者2人、一般参加 17人、当法人関係者1人） ・事業説明 ・ブレイクアウトルームを使った「語らい」 ・「語らい」の共有と討論 ・まとめ
9月	1年目の事業報告書完成

(2) ユース語りベインタビュー対象者と被災体験

No.	氏名	発災時 学年	発災時 住所	被災体験
1	西城 楓音	小学校 2年生	石巻	学校から帰宅し、自宅にいるときに地震が発生。自宅は床上浸水し、2階に避難してしばらくそこで生活する。2歳下の妹を亡くした。
2	永沼 悠斗	高校 1年生	石巻	自宅全流失、故郷が災害危険区域、家族3名が犠牲。親戚に行方不明者がいる。
3	只野 哲也	小学校 5年生	石巻	小学校のグラウンドに避難して時間を過ごし、避難途中で津波にのまれる。もう一人の助かった少年と数人の大人と山中で一夜を過ごし、翌日避難所へ。
4	阿部 住	高校 1年生	石巻	自宅で被災。祖母と2人で全壊して流された家の中で9日間を過ごす。たまたま上を向いて倒れていた冷蔵庫内の食料などでしのぐ。夜は寒くて寝られなかった。救助の瞬間からマスコミに追いかけられた。
5	武山ひかる	小学校 4年生	東松島	授業中に地震が発生。校庭に避難。引き渡しで一旦自宅に帰宅し、家族とともに車で高台に避難する。寒さが厳しく自宅に戻ろうとし、途中で車が津波につかまったが、抜け出して隣の市の小学校の避難所へ。避難所を転々とし、仮設住宅に入居。
6	雁部那由多	小学校 5年生	東松島	自宅で被災。小学校へ避難。目の前を人が探されていくのを目撃。手を出せなかったことに悔いがある。「16歳の語りべ」(ポプラ社 2016)
7	津田穂乃果	小学校 5年生	東松島	地震発生時は学校にいた。学校から直接内陸の親戚宅へ避難したため波を見ていない。家が流失し、5年間仮設住宅で暮らした。「16歳の語りべ」(ポプラ社 2016)
8	鈴木 智博	小学校 6年生	女川	津波で家が全壊し、親戚の家を転々とし、遠方の学校へ転校した。地元の中学校に戻ってきてからは、1000年後に津波を伝えるための石碑建立にとりくむ。
9	清水 葉月	高校 2年生	浪江	浪江町で高校2年生とのきに被災し、震災発生の3日後に千葉県の母の実家へ避難。大卒まで関東にいた。大槌、女川でインターンをし、その後女川へ。現在は石巻在住。故郷にはまだ帰れない。
10	高橋 敦浩	中学校 3年生	陸前高田	卒業式練習中に地震が発生。中学校は高台にあり津波は免れた。津波により、当時一緒に暮らしていた母と兄、妹を亡くした。中学校の避難所生活を送った。
11	遠藤 魁	中学校 2年生	気仙沼	体育館で被災。被災直後、中学校が避難所となり、避難所外避難者(在宅避難者)に食事を支給する等、さまざまなボランティア活動を長く行った。
12	紺野 堅太	中学校 1年生	釜石	中学全員で避難した後、震災翌日に親戚宅に避難。その翌日に親が迎えに来て2ヶ月程別の場所で生活。その後は2年間仮設住宅で過ごす。家が全壊し、とてもお世話になった先輩を2名亡くした。
13	川崎 杏樹	中学校 2年生	釜石	体育館で部活中に震災発生。その後、隣接する小学校の児童と一緒に高台へ避難し津波から逃げ切ることができた。

No.	氏名	発災時 学年	発災時 住所	被災体験
14	岡田栄南花	中学校 2年生	釜石	中学生、小学生と一緒に避難場所、二次避難場所へと避難。さらに高い山へと避難を繰り返し、市内の避難所へ。その後父と避難所、生活の場所を転々と変えていく。他県の高校に進学。
15	沼崎 健	中学校 2年生	釜石	校舎内会議室に一人でいた。揺れが収まったのちに校庭へ。そのまま生徒一丸で第一避難場所まで避難。さらに上へと、小学生と手をつないで避難。第二避難場所についてすぐ、海側を見ると、黒い壁(津波)が迫ってきているのを目撃、すぐさまさらに上へと走り出した。高速道路を歩き、途中でダンプトラックに拾ってもらい、中学校体育館へ避難し一夜を明かす。翌日、母方の実家へ向かい、そこで避難生活を送った。
16	狐鼻 若菜	中学校 3年生	釜石	中学校から走って1次避難場所へ。その後2次避難場所、山へと避難を繰り返して、最後は高速道路を歩き、トラックの荷台に乗って市内の中学校に避難した。他県の高校に進学。
17	菊池のどか	中学校 3年生	釜石	中学校で地震にあり、800m先の1次避難場所に避難。その後、2次避難場所に避難した際、津波を見てさらに上の山に避難。その後、市内の中学校に移動して一夜を過ごす。

(3) 専門家・事務局体制

氏名	所属
小田 隆史	宮城教育大学防災教育研修機構 副機構長・准教授
齋藤 幸男	元・高校教員 東北大学非常勤講師(震災当時、石巻西高校 教頭)
佐藤 敏郎	小さな命の意味を考える会 代表
高橋 哲	芦屋生活心理学研究所所長 心理士
船木 伸江	神戸学院大学現代社会学部・社会防災学科釜石 教授
森本 晋也	元・釜石市立釜石東中学校教諭
浦島 博幸	一般社団法人子どものエンパワメントいわて 代表理事
久保 力也	株式会社8kurasu 代表取締役
菊池のどか	株式会社8kurasu ユース語りべ
清水 葉月	一般社団法人スマートサプライビジョン ユース語りべ
石井布紀子	NPO法人さくらネット 代表理事
諏訪 清二	兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 客員教授
中野 元太	京都大学防災研究所 助教

3 インタビューで明らかになってきたこと

ユース語りべへのインタビューは対面と遠隔の2方法で行った。一人当たりのインタビュー時間は約2時間ほどで、複数の専門家、事務局員が聞き手となった。

インタビューの冒頭に調査プロジェクトの目的を伝え、さらに、言いたくないことは言わなくてもよいこと、途中で苦しくなったら止めてよいこと、インテビューは録画すること、録画は記録して見直すことを目的としたものであり外部には出さないこと、インテビューで話した内容を個人を特定できる形で発言者を明記して外に出すことはしないこと、などを説明して了解を得た。

(1) 「社会的な意味を持つ語り」と「個人的な意味を持つ語り」

ユース語りべ17名の語りを、その目的と内容によって二つに区別できる。一つは、体験を通して災害への備えや正しい対応を理解・実践してもらいたいという願いが込められた語りであり、もう一つは、自分の被災体験やその後の生活、人とのかかわり、心の揺れや辛さ、あるいは楽しかった出来事や安心感を自由に語る語りである。

ここでは、前者を「社会的な意味を持った語り」、後者を「個人的な意味を持った語り」と呼ぶこととし、①語りの特徴、②語りべになるきっかけ、③語りの工夫、④語りに対する評価、⑤語りべ活動を継続する原動力の5つの視点で整理する。

	社会的な意味を持つ語り	個人的な意味を持つ語り
語りの特徴	<p>語りべと聞き手という役割分担が明確である。</p> <p>社会的な意味を持った語りの本質はガイドとしての語りである。語りべは、震災遺構や石碑などのリアルな存在を通して(ガイド)、あるいは写真や図表を用いて(講演)、事実を正確に伝えようと工夫を凝らす。体験の事実や防災の知識の伝達が目的である。</p> <p>語りを重ねる中でも変わらない部分と語りとともに変化していく部分がある。変わらない部分は、被災前の人々やまち、生活であり、被災体験の具体的な事実である。事実を伝えるというガイドの本質が変わらない部分である。</p> <p>変わっていく部分は、聞き手との質疑を通して語りべが気づいた、聞き手が聞きたがっているであろう部分を取り入れていった結果であり、聞き手とのやり取りの中で語りべがふと語りたくなった予定外の内容である。語りの成長とも言える。</p> <p>1. 語りの変化の繰り返しが、語りべにとっては震災体験と向き合っていく過程となる。この部</p>	<p>語りべと聞き手という役割分担は明確ではない。</p> <p>個人的な意味を持った語りにシナリオはない。語りべは、その時に心に浮かぶ自分の言葉で語る。</p> <p>ガイドや講演といった、不特定多数を相手にした一方的な語りではなく、少人数の聞き手とのやり取り、あるいは2人から数人の対等な対話という形をとる。</p> <p>2. 語りべと聞き手という明確な区別はない。語りべが聞き手となり、聞き手が語りべとなる。一方的な語りではなく「語らい」の形をとる。語りべと聞き手が対等の立場で語らう場合もあれば、年長者が寄り添い、年少者の語りをサポートする語らいもある。そして、寄り添うセンターと一緒に悩む主体である。ともに語る安心感、誰かがそばにいてくれる安心感がある。</p> <p>3. 語りべは、社会や誰かのために語っているのではなく、自分のために話している。</p>

	<p>分は、個人的な意味を持つ語りと重なてくる。</p> <p>聞き手の希望を聞きながら一生懸命に事実を伝えようとするが、そうすればするほど、疲れてしまうという語りべもいる。語りが完成されたシナリオになっていなくて（成長過程にあって）、その場で考えながらの語りがエネルギーを要すからなのかもしれない。</p> <p>体験を語りながら、目の前の聞き手は単につらい体験を聞きたいだけなのだろうかと自問するときがあるという語りべもいる。自分の語りが聞き手にどれだけ深く届いているか、本当に理解してもらっているかを真摯に考えているのである。</p>	<p>4. 語りの内容は、聞き手とのやり取りの中で常に変化していく。被災体験といった事実よりはむしろ、不安、戸惑い、逆に安心感など様々な感情が表現される。学校での出来事やテレビや漫画の話のような、日常の話題も含まれる。</p> <p>5. 個人的な意味を持った語りの場には安心感が求められる。そこにはじっくりと聞いてくれる人、寄り添ってくれる人がいて、語りべは聞き手の存在に脅かされることはない。</p> <p>6. 語り始めると「悲しみを乗り越えた」と評されることがあるが、実はそうではなく「向き合えていなかったものに向き合えるようになった」という感覚である。ただ、日々を生きるのに精いっぱいの中で語ることに重さを感じることがあり、頑張ろうと思えば思うほど疲れことがある。小さな子どものころには震災を理解できず、ただ漫画の世界、ファンタジーの世界と感じたこともあったが、それが数年を経て自分の体験を言語化できるようになると、体験を正確に語ることができるようにになったが、同時に、体験の苦しさも増加した。その苦しさも聞き手との安心感の中で語られる。</p>
語りべになるきっかけ	<p>学校に講演依頼があって先生に声をかけられたとか、高校の部活動を引退して時間ができたときに、大人から一緒にやらないかと声を掛けられたなど、誰かに誘われて語りを始めた若者が多い。震災から5年ほどして、被災地と未災地の大学生たちが震災体験を交流する場をつくり始めたが、そこに呼ばれたのがきっかけだという語りべも多かった。</p>	<p>車座になって思いを語れる機会に参加して、その時初めて子どもでも語っていいんだと思った。</p> <p>震災体験ではなく学校のこと、友だちや先生のこと、マンガやテレビの話題など、日常を語る場を大人が作ってくれて、そこでは震災のことも話せた。辛いことだけではなく、楽しいことも語っていいんだと思ったことが大きい。そこには、自分が辛い時にじっくりと話を聞いてくれる人がいて安心して語れた。</p>

語りの工夫	<p>7. ガイドとして語るときは、聴き手がリラックスして聞けるような雰囲気を作ろうとしている。特に、大川小学校遺構にやってくる人は、緊張して話を聞ける状態ではない人が多い。震災前の楽しかった学校生活の話を冒頭に持ってきて聞き手の心をほぐすなどの工夫をしている。</p> <p>ひとりで語るのではなく、2人、3人で語り、お互いを補い合っている。時には自分たちの語りを振り返ってお互いを理解しあい、自分自身を理解する機会を持っている。</p> <p>8. 語りべがぶれないように、前もってストーリーを決めて語る。語りの中でメッセージを発信するが、すべてを話した最後の段階で一番伝えたい話をするようにしている。また、一方的な伝達だけではなく聞き手との質疑応答を取り入れている。</p> <p>遺構や石碑の前で語る、視覚的にも理解できるように写真や図表を用いる、実際の避難経路を歩きながら説明する、など、リアリティをもって学べるような工夫をしている。</p>	<p>9. 体験を聞き出したりするような強要ではなく、自発的に語れるような場づくり、自由に「言える」雰囲気作りが大切である。</p> <p>震災体験を語るのが目的ではなく、日常生活の様々な出来事を、お茶やお菓子、ランチをしながらしゃべりあう。その延長線上に震災体験の語らいがある。</p> <p>対面で、同じ場を共有しながら語り合えるのが良いが、オンラインであっても、そこに存在する聞き手との壁に守られている感覚があって語りやすい時もある。</p>
語りに対する評価	<p>講演では、聞き手の態度で自分の語りが伝わっているかどうかを判断している。頷いてもらったり、メモを取ってもらったりしているのを見ると、伝わっていると実感できる。</p> <p>学校での講演では感想文をもらって自分の話がどのように受け止められているかを読み取っている。特に伝えたかったメッセージを受け止めている感想文を読むと素直にうれしい。感想文には「もし私なら…」という表現が散見される。自分事としてくれていると感じる。</p> <p>語りを聞いて実際に災害への備えを実行した、家族と話し合ったという報告を聞くと伝わったと思う。</p> <p>そういう評価を得たという達成感、成功感覚が語りの継続につながっている。</p>	<p>自由な語らいの検証・評価は不要ではないだろうか。語らいの中で形を変える表現・語りを、聞き手（時には同時に語りべとなる）が、それぞれの受け止め方をすればよい。</p>

語りべ活動を継続する原動力	<p>人前で自分の体験を語ることには、時には恐怖を感じる。それでも語れるのは、伝えられたという達成感である。</p> <p>10. 同じ思いを持つ仲間の存在は大きい。1人ではできないが、仲間と一緒に伝えられる。</p> <p>11. 先輩・大人のサポートがあるので続けられている。 語りの依頼にはできるだけ応えていきたいと願っているが、その場がない、あるいは少ないと感じている。</p>	<p>12. 聴いてくれる人がいて、安心感を持って語ることで、自分の心が休まる感覚がある。</p>
---------------	---	---

(2) 「社会的な意味」と「個人的な意味」－混ざりあう二つの語り－

ユース語りべたちの語りを「社会的な意味を持つ語り」と「個人的な意味を持つ語り」に分けてその本質を考えてきたが、実は、語りはこのふたつに明確に分かれるのではない。

「社会的な意味を持つ語り」では、事実を知りたい人、その事実から防災を実行に移す人を聞き手と想定し、語りべは被災の事実、防災の知識・技能を伝えようとする。防災教育的な語りともいえる。語りべと聞き手の役割は明確に違っている。そして、その語りには「個人的な意味を持つ語り」も含まれていることがある。

一方、「個人的な意味を持つ語り」は、ただ聞いてくれる人、寄り添ってくれる人を聞き手と想定し、語りべは自分の災害体験と向き合いながら、その苦しさ、悲しさ、時には楽しかったことも含めて、心の中にある感情を聞き手とやり取りする。語りべ、聞き手という役割分担は明確ではない。語り合いながら心を整理していくという意味では、心のケア的な語りである。そして、その語りには「社会的な意味を持つ語り」も含まれていることがある。

「社会的な意味を持つ語り」に「個人的な意味を持つ語り」が混ざりこみ、「個人的な意味を持つ語り」に「社会的な意味を持つ語り」が含まれていることがあるが、このふたつの語りはグラデーションの様に存在しているのではなく、白い紙の上にいくつもの黒い模様があり、黒い紙の上にいくつもの白い模様が点在している。

(3) 語りを取り巻く物語と「語らいの場」への期待 ~ユース語りべの声から~

① 語りの始まり ~卒琢同時、あるいはちょっとしたきっかけ~

インタビューを受けてくれた17人のユース語りべは、語ろうという思いを持っていた人も、語りたくないと思っていた人も、そもそも語るという行為が念頭になかった人も、何らかのきっかけで語りを始めている。それは、語りべ自身の中から湧き出た動機(motive)なのか、外から与えられたきっかけ(incentive)なのか。

若者が被災体験を語ると、マスコミは「悲劇」や「奇跡」の経験者が同じ被害を繰り返さないようにと願って語り始めたと伝える。語りの動機は、被害を減らすためとか、悲しむ人や辛い思いをする人を減らすためといったように、被害軽減と人間尊重の脈略で説明されることが多い。しかし、大切なことだからという理由だけでは、人は語れるのだろうか。

ユース語りべの多くは、そんな正義感や責任感を語りのきっかけとしたのではなかった。むしろ、語りという行為をする・しないという考えがあろうがなかろうが、何らかのきっかけが大人や友だち、知り合いから与えられ、なんとなく語り始めたというのが本当のようだ。

- 語りたいと思っていたが、理由はわからない。NPOのまちづくりの活動をする中で大きくなってきた。
- 高校1年生の夏に、友達から1人で話すのはさみしいから一緒にやってくれないかと誘われたのがきっかけだった。
- 高校3年生の時、部活を引退してふと時間ができた。そんな時、大人の語りべが一緒にやらないかと声をかけてくれた。
- 県外に転校した。転校先の同級生は、「震災を経験したけれど何もなくて良かったね。またいつも通り学校生活を送れるよね」みたいな感じだった。私の友達はみんな避難所にいたのに。その時、身近な先生が向き合ってくれた。最初は、何で私に関わってくれるの、みたいな懐疑心しかなかった。珍しさで近寄って来るのかなと思って、心は開けなかった。被災地で支援活動をする心理の医師の話を聞く機会があって、被災地のためにここまでやっている人がいるのだと驚いた。それまではむしろ、みんな忘れている、触れないことにしようとしているのではないかと感じていたからだ。そうではないと知ったときに、初めて話せる瞬間があった。その場にいた先生が「じゃあ、みんなに話してみろよ」と、クラスメート何人かと先生と話す場を設けてくれた。そこで初めて震災体験を話せた。
- 本格的に語りべを始めたのは大学の頃だった。もともと震災体験を伝えたいと思っていたが、自分から積極的に動くタイプではなかった。だから機会をつかめなかった。大学生の時、中学時代の先生が宮城の小学校で津波の話をするから一緒に来ないかと誘ってくれた。それが初めてだった。
- 初めて海外に行って、言葉の通じない人たちの中に入つて、緊張が解けてすごく安心した。何を言ってもバレないというか。だから、泣いてもいいし、何を話しても、ああ、そうなのねという感じで聞いてくれた。気持ちが楽になって、自分の家は被災してはいないけれど、伝えるって大事なことだなっていう、なんとなくポジティブな気持ちに変わってきた。

② 語りの工夫 ~言葉の力とモノの力~

「社会的な意味を持つ語り」では、聞き手を念頭に置いて話を組み立てる。壮絶な被災体験を聞かなければと身構え力が入っている聞き手は、まだ聞ける状態ではない。そういう人に、震災前の日常を話し、肩の力を抜いてもらう。写真を使って理解を助ける。聞き手の年齢によつても言葉を選んで語りかける。遺構や石碑で実物を前にして語る。震災体験と音楽を掛け合わせる。ユース語りべの中には、そのような工夫を凝らして伝えたい内容が正確に伝わるように努力していた。

「個人的な意味を持つ語り」では、雰囲気が大事だった。何を話しても受け入れてくれるという安心感、学校のこと、友だちのこと、マンガやテレビのこと、何でも話し合える場があつて、その延長線上に震災への「思い」を語り合える場が生まれていた。

- 話の内容が重くなりすぎると聞き手は身構えてしまう。聞く側の体力を使わないようにしよう、押し付けているのが申し訳ない、やさしくないという感覚は持ちながら話している。
- 話す内容は、「どう思った」より、感情をこめずに客観的に「事実」を話すようにしている。感情はあえて発信しない。
- 震災遺構の前では説明もするが、自分で感じたものを大切にしてもらいたい。碑文には、自分たちの思いをできるだけ入れたい、それを読んだ人が自分たちの命を守るような思いにならなければ、と願って書いた。
- 俳句は、自分たちの当時の気持ちや考えを端的に表しているというか、少ないフレーズで表現するので作りやすかった。作文と違って短い文章なので、やっぱりインパクトがあった。
- 絵が好きだから物語にして伝えたいと思い、たくさんの人々に支えられながら絵本を作った。言葉だと重く

なりすぎるから。主人公は白鳥。震災を直接的に扱うことは避けた。

- ピアノと語りのコラボをした。「音楽があることで、リラックスしながら頭を整理しながら聞けました」「私たちの県では、直接被災者から聞けないので身近にいる女性の口から出た言葉は、身近に感じて説得力があった」という感想をいただいた。震災を知らない人が「話を聞いてかた良かった、家族と話したいです」と言ってくれた。

③ 語りに対する評価～語ってうれしかったこと、嫌だったこと～

語りを聞いた聞き手の反応は、頷き、涙、メモ取りなど様々である。語りべは聞き手のふとした動作や質問内容から、語りに対する評価を探っている。

学校での講演では、聞き手である子どもたちは感じたこと、考えたことを感想文という形でユース語りべに伝える。作文の特徴の一つに子どもたちが「もし私なら…」と語りべの体験に自分を重ね(過去に自分を置く)、自分ならどう行動したかを考える(災害発生を現在形でとらえる)。この思考は、将来災害に遭遇した時に必ず生かされるだろう(未来の災害を想定する)。もう一つの利点は、災害の語りが子どもたちから家族へと伝播することである。実際の聞き手以上の人々に、語りべの体験が伝わっていく。

語りべは、伝わったと思ったとき、自己を肯定する。自分にもできることがあると納得する。これは、語りの継続にとって大切な要素である。

- 震災遺構でガイドをしている。話を聞いた人が1年後に再訪してくれて、家族で話し合って家具の固定をした写真を見せてくれた。受け止めもらえたと思った。
- 友達や家族ではない第3者のいる場だから話せた。アメリカに行ってしゃべれた。みんなで車座になってしゃべる雰囲気がとても心地よかった。
- 震災体験とその後の活動を話したら、活動への評価が多くもらえた。
- 大人の反応は「かわいそうだね」、「辛かったんだね」、まさしく「the 同情」。私たちは同情が欲しくて語っているのではないのだけれど、同情を返されることがあって。「親を失った時の気持ちはどうだった?」とか質問をされて、その時は嫌だなって思った。
- 子どもたちに話すと、笑ってもらおうと出した写真とかエピソードで笑ってくれるから嬉しい。大人の人にその話をして、「大変だったね」と重苦しい雰囲気から抜け出せない。津波の中に車ごと入ってしまったと話をしたときに、子どもたちから「車ごと津波に入っちゃったときどんな気持ちだったの?」という風な質問があったり、私の友達が亡くなってしまったという話をしたときに「それを聞いたときどんな気持ちだった?」とか聞かれたりする。そうやって聞いてくれた方がこちらも思っていることを楽に話せる。逆に大人はオブラートに包んで質問をしてくる、いや、むしろ質問しない。「聞きたいことあるなら聞いてくれていいよ。話せるから話しているので、話せないこと特にないからいいよ」という気持ちになる。
- 私の話を聞いた高校生が長文の感想文を書いてくれる。町であって感想を言ってくれる。「家族や友だちに伝えたよ」と言ってくれる。
- 自分に置き換えるという作業を子どもたちは勝手に、柔軟にしてくれる。
- 高知県の中学校で話した後、感想文をいただいた。生徒は20人くらい。感想文の量がすごくてめちゃめちゃ長文で感激した。初めてそういうものももらったので。私が話した内容をもとにして、ここの地域でも津波から逃げたいとかそういうことが書かれていて、何か伝わっているのだなと思った。
- こうやって活動を始めて、私たちの話を聞いた人の中に、防災の意識が高まったりとか、自分事としてとらえられるようになったりしたという人がたまにいる。そういう人がいると、自分たちのやってきたことは間違ってはない、響く人には響くという風に感じる。

- ちらほら泣いている人もいた。伝えたいことや自分たちの現状はわかってもらえたのかなと思った。泣いている人を見て、共感してくれる人がいると思った。
- 講演会で、知らない人の中でしゃべるとき、確実に2人、3人は、ああそうだと言ってくれる人がいる。私たちの存在、私たちの言葉を否定しないでいてくれる人がいる。だから続けられた。
- 高校生平和大使として国連欧州本部で震災の話を英語で話したことがある。当時の欧州本部の局長が泣きながらコメントを下さったのを覚えている。内容は「つらい体験を話してくれてありがとうございます。我々ができることは何でも協力します。」だった。コメントの内容よりも、人種、言語も違うつたない英語で話した僕の言葉を、ここまで聞いてくれる人がいた、何かを感じてくれる人がいた事実に衝撃を受けた。
- 言葉の反応じゃなくて、うなずきが一番うれしかった。泣きながらうなずくのではなくて、「ふーん」といううなずきが一番うれしかった。
- 一番うれしかったのは、友達として、知り合いとして聞いてくれた場面。話してもよい場が欲しいという意味での語る場。語りべ同士で語る機会が圧倒的になかった。
- 初めて講演を行った中学ではちゃんと伝えよう、私もちゃんと向き合おうと思っていた。当時のことを鮮明に思い出しながら気持ちを込めて伝えたら、生徒たちもすごく真剣に聞いてくれた。ちゃんと伝わったという気持ちになった。
- 「聞きにくいのだけど…」と聞かれると答えやすかったけど、ぶっきらぼうに「家族は全員無事だったの？」とか聞いてくる人にはあまり答えたくなかった。聞いてくる人の態度で答えが変わることは多かった。
- 他県で中学生に話をしたことがある。避難所での生活を体験していないからぜひ教えてくださいと、目をキラキラさせて前のめりで聞いてくれた。ものすごく一生懸命に防災を学んでいる生徒たちで、話をした私たちも頑張らなければと思った。一緒に行った友達と「うれしいね」って話した。

④ 語りの葛藤 ~被害の大小と語る資格、生き残った罪悪感、被災地を出た自分が語っていいのだろうか?~

ユース語りべの語りは絶えず揺れている。ガイドとしての語りであっても、時には苦しくなって語れなくなったり、逆に、ふと、今まで語っていなかった事実や思いに言及することがある。語りは、語りべと聞き手が相互作用の中で作り上げていくものなのである。

「社会的な意味を持つ語り」の中にも「個人的な意味」が含まれ、その「個人的な意味」が揺れを引き起こすのかもしれない。

被災の大小と語る資格は語りべが絶えず自問する課題である。

中高生で被災し、高校は他県に進学した人が数人いた。被災地を離れた罪悪感、新しい土地の人々の災害認識への違和感を持ちながら、どちらの感覚も肯定しよう配慮しているようであった。

- 被害が大きい小さいでまず括られてしまうので、そこでしゃべるべき人とそうでもない人みたいに勝手に線引きされてしまうと、若い世代が話せなくなってしまう。家族を亡くしている人のほうがテレビとか新聞では目にすることが多い。だけど、そうではなくて、被害の大小ではなくて、あの日どう思って、今どうやって生きているのかにもっと目を向けていきたい。
- 活動に興味はあるけれど、「大きく被災していない私が話していいのだろうか?」と迷っている人は多い。一緒に活動している友達は家が流失して、両親と祖父が亡くなってしまって、お母さんのおなかの中にいた妹も亡くなつた。その隣にいると、震災経験の大小を感じる。友達が頑張って話しているけど、私が自分の経験を話していいのだろうかと思う。今でも私が話していくのかなと思うことはよくある。
- 震災からしばらくは、被災した人に対しての申し訳なさが大きくて、同じ街に住んでいるのに同じ経験をできなかつたというか、たぶん同じ気持ちになってあげることもできないっていう気持ちがあった。亡く

なった方の中に、1週間前にポンとお守りをくれた先輩がいて、なんでこんな同じ町でこんなことが起きるのという気持ちがあった。ずっと引っかかっていた。3月9日に地震があって、その時話をした人が11日にかなり亡くなってしまった。「地震だね、頼むよ」といった人がいて、「頼むよ」って何だったのだろうとずっと引っかかっていた。

- 私は、生きていることの罪悪感を震災直後からぬぐいきれなくて、なぜ私が生きているのだろうとか、中学校ではなぜ防災学習をやらせてもらえたのだろうとか、やっていなかった学校もたくさんあって亡くなつた方がたくさんいる中で、「なぜだろう、申し訳ない」という気持ちのほうが最初は強かった。生きているから何かをしなければならないという思いと共に、頑張ろうと思うと怖くなるというか、自分が生きていて喜んでいたら不謹慎なのではないかという気持ちがあった。防災教育を受けたから助かりましたただけを伝えるのが、やっぱり亡くなつた方に失礼なのではないかなと。マイナスな気持ちがすごく強かった。
- 「あなたが強い人だから話せるんじゃないの」と言われたこともあって、話してはいけないと考えた時期もある。子どもたちは話すことを選択することはできるし、それを選べる権利もある。だから大人がむしろ環境としてその場を作つていかないと、みんな話も表現もできなくなつてしまうと思う。
- 時々、もともと住んでいた被災地の友達と話をしていると、震災に向き合えていない子もいると聞く。私が県外でべらべらと話しているのに違和感を持つときがある。両方の友達が持つ気持ちの差が、片方にいると分からなくなつてくる。傷つけてしまうこともありますうだなと思った。なるべく両方の友達の話を聞いて偏つたことは発信しないようにしたいと思っていた。被災地の体験を被災していない地域で伝えると、私が被災者代表と捉えられかねない。ただ、こういう風に言葉にして伝えられている人が大半ではないし、現地ではまだ話せない人もとても多い。その現状を伝えなければと思いながら、間違つた情報を伝えてしまうときもあるから気をつけていた。
- 高校2年生の時に被災して、その後すぐに他県の高校に1年間だけ転校した。こんな大変なことが起きて周りの人たちも関心があるだろうと私は思っていた。話したいという気持ちが強い高校生だった。でも、周りの大人も子どもも聞いてくる人がいなかつた。大人でさえ「大変でしたね」と言って、それ以上触れないようにしていた。腫れものの様に、それ以上は聞いてこないんだなと、子どもなりにも感じていて、それがものすごく辛かつた。
- 違う体験の人たちを被災者と一括りにするというのがあいまいだと思う。
- 自分がしゃべることで人を傷つける、の裏返しは、自分を傷つけること。しゃべることで思い出して傷つくかもしれないし、語るなと言われるかもしれない。自分が語つていいのかというのはそこから来ている。私たちが恵まれているのは大人がそういうのから守ってくれたこと。
- 講演会にリピーターがいるのはなぜか。多分、語りべの成長を見たいのではないか。リピーターの存在が不思議だ。

⑤ 語れなかつた時 ～語るようになったのはなぜ？～

ユース語りべたちは、被災直後から自分の意図で語り始めたのではない。直後は、マスコミの取材に答える形で被災体験を語っていた。それも、語りたくないけれども、何かしゃべらないといつまでも追いかけ続けられるからといったように、仕方なく、意図もなく、ただしゃべらされたという事実が多い。

では、意図を持って語り始めたのはいつ頃だろうか。多くの語りべは5年前後の時間を要している。小学生や中学生の時の体験を、正確な言葉で表現するまでには言葉の獲得期間が必要だったのだろう。言葉を獲得することで被災体験を語れるようになった。ただ、言葉の獲得は、被災の辛さを悟らせるという苦しさを語りべにもたらした。

- 私は自分の言葉で発信するまでに5年かかった。ずっと伝える苦しみがあったし、生かされた葛藤みたいなものがいつもあるって、しんどいなと思った時期が長かった。そういう時期があったからこそ、思いを伝えられると思う。迷いながらも一歩踏み出すタイミングが、今なんじゃないかなと思う。
- 被災のストーリーとその後のストーリーを話した。子どもの時はファンタジー、マンガの中の出来事だとしかとらえられなかつた。年齢を経て言葉を獲得して体験が重くなつた。現実ではないようなことが起こつていて、当時は理解できなかつたこと、私が納得できなかつたことが、成長するにつれ、なんかどんどん自分の中で理解ができたし、受け入れられるようになってきて、それでより悲しみとかが、震災当時よりも今のほうが強くなつてきていている。当時は言葉にできなかつたけど、言葉にできるようになって、自分の気持ちも理解できるようになったから。決して悲しみがなくなつたとか悲しみを乗り越えたとかいうわけではない。震災当時から数年間向き合えていなかつたものにやっと向き合うことができて、それが自分で今やつと、時間をかけて、どんどん言語化できた。
- 他県の高校に進んで、そこではもう全然話せない状況だった。私が、家が流されたと言つたら多分雰囲気が重なくなるだろうなと思って、最初は言えずにいた。何かの弾みで友達に聞かれたので、自分の家が流された話をした。「いや、でも全然あの、なにも気にしないでね。誰も身内は死んでないから」と言いながら。それからめちゃめちゃ聞かれるようになって、そしてみんなが泣く。私は泣いてないのだけれども、聞いているみんなが「よく生きていたね」みたいな感じで泣いてくれる。その時に、私たちは壮絶な体験していたのだと気づいた。中学のときはみんな同じ境遇だったのでなんとも思わなかつた。それはすごい印象に残つてゐる。
- 他県の高校に進んだが、学校の友達には私から積極的に話さなかつた。話すとしても真面目にならないようにさらっと話すだけだった。気を遣わせたら怖いから深く話してこなかつた。
- 一方で、町がこんなになって、こんな災害を繰り返さないために、風化させないためにという思いもありながら、でも根源では誰かに聞いて欲しいという欲求もあって、話すこと自体は苦じゃなかつたと思う。でも、高校時代、友だちは99%震災の話はしなかつた。あえてしないようにしているわけでもなく、しなかつた。面白くない話だから。

⑥ 語りの重さ、苦しさ～周囲の支えと語りの変化～

ユース語りべは、事実を淡々と語っているわけではない。悩み、壁にあたり、誰かに支えられ、同じ語りべ同士で話し合い、何とか語りを続けている。そして語りを続ける中で、ポジティブな姿勢を常に忘れないでいる。震災前の普段の生活、楽しい防災教育といった、被災体験の語りとは親和性がないととらえられてしまう恐れのあるテーマも話題に挙げるようになっている。

- 普通の取材なら聞かれたことに答えばいい。だけど語りべだと自分でいろいろ物語とか考えて、いかに伝わるように伝えなければならないのかがすごく難しいなと感じた。調子がすごくいい時もあれば、語りをする場所に来るのにもエネルギーが必要な時もある。やっぱりそんな時に一人で結構抱え込んでしまう癖がある。そんな時に地域の先輩とか仲間、同じ地区の仲間に話を聞いてもらったりする。自分で今、何で悩んでいるのかなとか、何が必要なのかなというのを整理できる時間、やはり、人と話す時間。人に話を聞いてもらって、いろいろ自分の中のものを整理していく。それでも結構、波はあるけれど、多分、これからもそういう話し合いが継続をしていくために必要な、一番大切なことなのだと思う。
- 語る内容は嫌な思い出、トラウマ。感情をはさむと僕自身が耐えられない辛い体験だからこそ話したい時もある。誰かに聞いて欲しいときもある。客観的にとらえて自分を守っていたのかなと思う。安定させる

ために話していたのかも知れない。感情を入れたら、愚痴というか辛いだけの話をただただ聞かせてしまうことになるから。

- 初めて海外に行って「なんで?」、「生きている。OK!」みたいに言われて。「被災したから私と会えたでしょ」と言ってくれる人たちがすごく多かった。そういう人たちの中にポンと入った時に、「ああ、こうやって生きられることは幸せなことなんだな」という考え方方が見えたのかな。そして楽しんでいい、辛いときは泣いてもいいとその時わかった。生き残った罪悪感ではなく、生き残ったからやらなければならないこともあるという考え方へ変わっていった。
- 以前は、亡くなった人のことを話すことが多かった。亡くなった人たちのことを考えるのは、今を生きている人たちがプラスの気持ちで生きてくのにもつながると感じていたので。でも今は、亡くなった人の気持ちも考えつつ、震災に向き合うことよりも、ちょっとその前に戻ったというか、防災教育ってそもそも何だろうとか、防災って何だろうっていうようなところに目がいくようになってしまった。今まででは、私は次の人たちが生きるために話をしていた。伝承は目的ではなく手段だった。だけど、語りべを仕事にしているとそれが目的になってくる。伝承が目的にすりかわっていく。気づいたのは、目的は別のところにあるはずということ。中学校の時の防災は楽しかったし、好きなこととして褒められた。これから子どもたちには震災の事実を教えなければならぬと強く思うけれども、今の中学生たちは、震災前の私たちみたいに楽しく防災教育が出来る世代なのだという風にも感じている。知らないから教えなければならぬとは思うけど、楽しく学ぶというところに、今は気持ちがシフトしている感じがする。ある意味、不謹慎という言葉を考えなくなつたというか。たぶん時が流れているからかもしれないけれど。

⑦ 語りがもたらす心のケア ～語りを通して震災と向き合い、心を整理してきた～

ユース語りべは、語り始めるまでの数年間、あるいは語り始めてからも、自分の心に生じる辛さ、不安、揺れ、戸惑いなどと語りを通して向かい合ってきていたようであった。語りが自分の心にもたらす何らかの変化を、語りと語りに至る思考を通して実感しているようであった。

- 大学はほぼ通えなかつた。途中で心がしんどくなつた。1人暮らしを始めて、1人で考えこんだ。寂しさや震災のことがどつと押し寄せてきた。自分では気づいていなかつたが、震災の悲しみに蓋をしていた。全部ため込んで大学生の時に切れてしまつた。悲しみのどん底に落ち込んで、気力もなくなつた。そうなつてから、祖母を亡くしたその悲しさを押さえていたのだと思った。祖母が生きていた日常の温かさを失つた喪失感、それを改めて感じた。両親共働きでおばあちゃんが親代わりだったから。両親が心配して会いに来てくれた。思いを両親にぶつけた。いったん実家に帰つた。そこでこみ上げるもの吐き出した。両親は聞いてくれた。「震災後の1年、何も言わなかつたね」と言ってくれた。それから自分の心を理解できるようになった。つらかったけど、今の自分にとってはいい体験だつた。
- 2人で話しているけれど、2人は違う。一人はどちらかというとぎりぎり自分で整理したことをしゃべつてゐる感じと、もう一人は語りべをしていく中で整理している感じ。一人はわかりやすく、もう一人はインパクトがある。一人は、自分自身が震災体験と向き合つてゐる、つまり、気持ちの整理の過程を見せていく。
- 体験を語る場が必要だと結構自問自答しながら、話してもいいのかなとずっと悩み続けてきていて、最近ようやく大丈夫と思えるようになった。
- 話を聞いた人が色々感じて、災害に備えてほしいとかそういう思いはもちろんあるけれど、結局は、今はまだ自分のために話しているという部分がすごく大きい。伝えることによって、話すことによって、自分の思いとかを整理できたりするから。

⑧ 語りの本質～語りべによる語りの分析～

語りべの中には、一人ではなく3人で補いあいながら語り続けている若者がいる。小学校5年生で震災を体験し、中学生の時に語りを始めた若者たちだ。ソロではない語り、補い合いながらの語りの本質を説明してくれた。明確に伝える「記憶」とあやふやにしか伝えられない「感情」。語りべたちは、単に語るだけではなく、自分の語りと向き合い、語りを通して自分と向き合っている。

- 誰かへの語り、伝えるための語りがあり、もう一つ、自分たちのための語りの時間があった。3人で語りべをするけれども、その3人が一緒に電車で移動している時、放課後に喫茶店で打ち合わせをするときの語りが自分たちに向けた語りの時間だった。僕はそれを準備と捉えていなかった。誰かに語る前に自分たちに向けて語る時間と捉えていた。お互いに映る自分を見るような感覚だった。講演だと自分が見えないけれど2人が相手だと自分が見える。記者に話すときは何もない真っ暗なところに言葉投げている感覚、鏡に映っている感覚になる。外向けの語りと呼んでいる。3人で話すときはうち向きの語り。匿名性と特定性と言ってもよい。匿名性は不特定多数、特定性は友達、家族への語り。それから知らない人でも1対1になると内向きの語りになる。
- 3人で語る僕らにとってはある程度救いがある。自分が話した内容への反応が返ってくるという安心できる要素がある。相手に自分がどう映っているかというのを確認する機会だった。それがとても重要だった。
- 語りの時に一番怖いのが、匿名の語り。それを僕は今でも一番怖い。一番悩むのは僕が見たことと、向こうが想像する場面が異なること。当時自分が体験した世界というものが、その場に誰も入り込めないというかのぞき込めない世界なのかなと思っている。語り始めたころは、僕の風景の中に誰かの目が入って欲しかった。でもその目が入って来てくれない。言葉を使って一生懸命伝えるけれど、自分の想像している世界の中に誰一人いないという感覚に陥ったことはある。あの時ああだったよねというような話はいつまでたってもできる。ただ、あの時こう感じたよねっていう話になると一気に詰まるようになった。余計な肉がそぎ落とされるようにきれいに記憶が整理されていて、当時の自分の感覚にはだんだん戻れなくなってきていくっていうのが、語り始めた時に起きた現象だった。だから3人でいま会話をしたとしても元の記憶が戻ってくるとは思えない。
- 整理された「記憶」を語るとこんなにも明瞭に伝わるものなのかと感じた時もあった。僕らの「感情」を伝えたいという語りがいかにあやふやで、いかに曖昧な世界かというのが、僕らも語っていてわかっていた。自分に対して語る時間は向き合う時間でもあると思う。社会的なものを背負ったらたぶん僕らは語れない。この場では話していい、この場には聞く人がいる、だから震災の話をしてもよいという場所が重要だった。

⑨ マスコミの功罪～決めつけ、曲解、誤解、ステレオタイプ、そして支え～

多くの語りべが、マスコミとの不快な経験を話した。事前に描いた被災者像に当てはめるための質問を繰り返す。話したことは書かず、「奇跡」と「悲劇」という枠組みでしか考えていない。記事を書くためには小学生や中学生を追いかける。

ただ、マスコミへの理解もあった。語りべ活動では、話した人にしか伝えられないが、マスコミを通して多くの人に伝えられる（残念ながら捻じ曲げられる時も多いが）。

記事を書くためだけではなく、対等の人として長く付き合ってくれる記者もいる。そういう記者は、何度も取材に来てじっくりと話し込み、意図を汲んだ記事を書いてくれる。

- 記者には勝手に書かれてしまう。家族を亡くした経験、悲しい経験が私の背景にあるから、そういう思いをしてほしくなくて、いま語りべをしていると書かれる。結果的にはそれはそうなのだけれど、語り始めた理由はもっとも前の後悔があるから。3月9日の地震の時に家族と地震や津波の話をしなかった。ちゃんとしていたら逃げてくれていたのにという悔いがある。亡くしてからでは遅いというのが、一番伝えなければならないところ。だから、それを伝えるようになったのかな。
- どんな話をしても「奇跡」という言葉でくぐられてしまう。震災前の日常や学校生活はなかったことにされてしまう。
- 転校した学校で記者に出待ちまでされた。本当に嫌で、何か話せば帰ってくれると思って話した。それが「奇跡の…」という記事になってしまった。
- 救助されてマスコミに取り囲まれて恥ずかしかった。すぐ入院したが、マスコミは病院に押し寄せてきた。夜中にもやってきた。病院で1回だけ共同会見を開いてもらい、それ以降は病院でも高校でもシャットアウトしてもらった。奇跡が記事になって、失敗した恥ずかしさは記事にはしてくれない。他県の大学に行って、そこで同世代に失敗を茶化されてそれが心地よかった。恥ずかしいことを恥ずかしいことだと認められて楽になった。
- 震災を経験して家族との会話や日常を大切にして欲しいというメッセージをメインに話したつもりだったけど、全部が全部つらい体験に塗り替えられていたみたいな経験が山ほどある。
- 当時はマスコミに「奇跡」という表現で取り上げられていたけど、記者の質問にはそこをめちゃくちゃ補強したい感じがすごかった。みんな無事に助かりましたっていうところに対するコメントが求められていた。実際亡くなつた方もいるのに、そういったところは一切書かれていない、あまりうれしくはなかった。聞きたい言葉を引き出そうとしているなと感じていた。似たような質問をずっと繰り返してきて、さっき答えたんだけどなと思いながら答えていたこともあった。中学3年生の時は、一番メディアが嫌いだった。
- あらかじめ記事はできていて、その中の「　　」の部分に入る言葉を引き出すまで、同じ質問をぶつけってきた。
- 今後どうすることをしたいかということをメインに取り上げてくれる取材も結構あった。自分自身、あの体験を次につなげるという部分を考えていなかつた。そこを記者と一緒に整理してもらってよかったですかなって思っている。
- 女性の記者の方と僕ともう一人でのインタビューの時、女性の記者の方が声を震わせて、「辛かつたこと、友達をなくされたとかありますか?」と聞かれた。僕ともう一人の生徒は割り切っているからと答えたら、記者に泣かれた。小さい子に同じ内容のインタビューをしたら子どもの親にすごく怒られたからインタビューするのが怖かったのだという。記者は伝えるのが仕事だけれど、そういう思いもあるのだなと感じた。聞きづらい、話しづらい部分は聞き手も話し手もあるのだと思った。聞き手に気を遣わせるのではなく、大事なことは自分で話していくかなければならないと強く思った。この記者はちゃんと伝えたいという意思を持っていると思ったから、友人を亡くした話を初めてした。今までの取材では絶対話さなかつたが、その人には話せた。

⑩ 未来に向けて、変化していく語り ~これから何を語りたいか~

多くのユース語りべたちが、自分たちが語るようになるまで体験を語りだしてからの壁と離れ、そこを支えてくれた大人、同世代の存在をもとに、語り合える場の大切さに共感している。

- 活動できる範囲が減ったり、就職したら活動できなくなったりするかもしれないという不安は大きい。語

りを義務にされたらなんかちょっと違う。できる人ができるときにできることをやる。一緒に活動させてほしいと言っている人もいるから、巻き込めたら。

- 話す活動は個々にバラバラにやっていても、多分どこかでちょっとずつ消えて行ってしまうと思っている。どこかで連携というか、横の繋がりを作らなければならないと思うけど、なかなか難しい。自分たちもこんなに活動しているのだから、絶対ほかの地域のことを知らないといけない、本当は他の構造だって行かないとダメだと思う。活動している側として、他の地域の方というか、他の人の話をちゃんと聞いて、吸収できるところは吸収したいし、逆に自分の話を聞いて気付いてくれることがあればうれしい。お互いにいい方向に行きたい。そういう意味では横のつながりが欲しいと考えている。
- 一度誘われて語り合う会に出た。高校の時に研究したハザードマップについて話すつもりだった。合宿の前乗りで来た人が集まったときに、すでに語りべをしている人も多かった。震災を語り継ぎたいという人たちが目の前にたくさんいることが私にとっては新鮮で衝撃だった。話してもいいんだと思った。話さないと伝わらないし、話さないと悲劇を繰り返してしまうとその時初めて感じた。震災体験がない人もいて、真剣に聞いてくれた。被災地ではない場所に住んでいる人たちに震災体験を話しても困らせてしまうと思っていたのが、私の話をちゃんと受け止めて共感してくれたのが衝撃だった。自分の思い込みを変えてくれた。
- 話す機会があるならちゃんと伝えたい意思はある。ツイッターでの発信も一応続けてきたので、今後も何かしらの形で残していきたい。発信を続けて、読んでくれた人が防災について興味を持ってくれたり、他人事じゃないと考えたりするきっかけになって欲しい。
- 当時理解できなかったことも、今はそういう意味だったのかと感じがあるので、伝えたい思いはある。ただ、機会に恵まれない。そもそもアクションを起こさないと、という気持ちは歳を取るたびに強くなっている。今なら話せるのにとか、そういう思いはけっこうある。
- 震災のことをいろんな人に知ってもらいたい。それに、話さないと自分が忘れてしまう。自分のためにもこの活動を続けたい。
- 目標にしていた数の石碑は建て終わったので、これからはこの石碑をいかに活用していくかという活動に移っていくと仲間で話している。
- 若い世代の話をもっと聞かなければダメだとすごく思っている。仲間とは、理解してもらうためにはまだ足りないという振り返りをする。

(4) 作られた語りとそれを根拠とした防災教育の危うさ

① 震災直後のマスコミ取材と子どもたち

インタビューに応じてくれたユース語りべたちのほとんどが、マスコミ取材に心を痛めた経験を持っていた。

震災後通い始めた新しい小学校に記者がやってきた。校門で出待ちまでして話を聞き出そうとした。それが嫌で仕方がない、何か話せば帰ってくれると思って、話をした。それが、「奇跡」という言葉を冠した記事になった。話した本質ではなかった。

3月の卒業式までは学校が取材をシャットアウトして守ってくれた。でも、卒業式の後、新聞やテレビの記者たちが一斉に卒業生を追い回した。何か話をしなければ帰してもらえないような状態だった。

取材対象者、被災者を演じながらしゃべらなければならなかつた。大変だったとか、辛かったとか、悲しかつたとか、そんな言葉を引き出すための質問を意図的にされた。震災前の学校生活など、もっと別の話を聞い

てもらいたかった。そんな話をしても、記事にはならなかった。決まって「奇跡」や「悲劇」で括られた。

もちろん、語りべたちは、一方的にマスコミ批判、マスコミへの不信を語っているのではなく、震災を伝えようとするマスコミの必要性や「それがマスコミの仕事」といった理解は示していた。また、マスコミへの感謝を伝える声もある。ボランティア活動を続けていたユース語りべは、自分が伝えたいメッセージをしっかりと書いてもらったと言う。支援者としての記事は、マスコミの考える像に合わせやすかったのかもしれない。また、ユース語りべ一人での語り広げていく作業には限界がある。マスコミなら一気に多くの人々にメッセージが届くと、マスマディアを評価する声もある。

自然災害や学校事故などの取材では、直後から子どもたちにインタビューするマスコミが多い。しかし近年では、その危険性を心理や教育の専門家が訴え、直後の子どもたちへのインタビューを自己規制するマスコミが増えている。ただ、「直後」という表現は曖昧である。東日本大震災のような大災害では、数か月たつても心の傷は生々しい。数年たってもまだ癒されていない傷がある。震災直後の子どもたちへのインタビュー、数年たって青年になってからのインタビューの在り方を考える必要がある。

本事業でのインタビューはそういうリスクを事前に説明し、本人の了承を得、また、途中でやめてもよいという選択肢も示しながら行った。また、体験談を根掘り葉掘り聞きとるのではなく、その後の活動や思い、今伝えたいことなどをメインに話を聞いた。2回行ったパイロット事業でも、参加者で理解・共有しながら「語らい」を進めた。その結果、ユース語りべから、取材的な「聞き取り」ではなく自由な雰囲気で話し合える「語らい」の重要性を聞き取れたのは大きな成果だと言える。

② 防災教育の視点で考える

マスコミは東日本大震災を伝えようと努力する。大所高所から震災を論じ、市井の人々の体験談を拾い集めて伝える。人々の体験の集大成が震災の真相を伝えてくれる。視聴者や読者は、伝えられる情報を事実であると受け止める。

防災教育の視点で、マスコミを考えてみよう。例えば、記事を教材にして授業をするとする。教師はそこに書かれている内容が事実であることを前提に子どもたちに学び取って欲しい内容を決め、指導手順を決め、授業を組み立てていく。もしその記事が、登場人物の真意を正しく伝えていない内容だったらどうだろう。教師は子どもたちに「嘘」を教えていることにはならないか。

教育はともすれば「予定調和」の学びを求めようとしてしまう。理数など、正しい解釈と運用が求められる科目はそれでよい。ただ、総合学習や個人の解釈や表現が尊重されるべき科目ではあらかじめ決められた価値を押し付けるのではなく、学習者の考え方や他者との話し合いを通して多様な価値を学んでいく必要がある。広義の防災教育もその一つである。その前提となる記事が、語りべたちの真意を伝えていないものであるとしたら、それに立脚した教育は「嘘」になってしまわないか。

「奇跡」や「悲劇」を表現するために、ある意味「修正」された体験談ではなく、ユース語りべが本当に伝えたい内容をもとにした防災教育教材の開発が必要だと考えられる。

4 パイロット事業

本プロジェクトでは、2度のパイロット事業を遠隔会議システムを用いて開催した（2022年6月25日、8月28日）。複数のユース語りべの参加を得て、全体会とブレイクアウトルームを使った分科会を行った。

第1回目のパイロット事業は18人の参加を得て、6月25日にオンラインで開催した。参加者のうち、ユース語りべは4人であった。ブレイクアウトルームを使った「語らい」の場を設定したが、少人数であったため、

語りべと参加者がじっくりと話し合うことができた。

第2回目のパイロット事業は26人の参加を得て、8月28日に開催した。3人のユース語りべが参加した。第2回では広報チラシを作成・配布した結果、一般参加者が増えた。

2回のパイロット事業の結果、「語らいの場」で語り合う時のルール、語る内容、避けるべき行為（体験や思いの強制的な聞き取りなど）が明確になってきた。以下、その概要である。今後この内容を精査して、語らいの場開催のマニュアルを提案していきたい。

スケジュール表（本日の流れ）

項目	時間
1 あいさつ	5分
2 概要説明	5分
3 自己紹介 2分×15人	30分
4 ブレイクアウトルームセッション 1 休憩 10分	40分
5 ブレイクアウトルームセッション 2	40分
6 全体の「語らい」	30分
8 終り	合計160分

語りの本質を語り合おう

E-PoCh

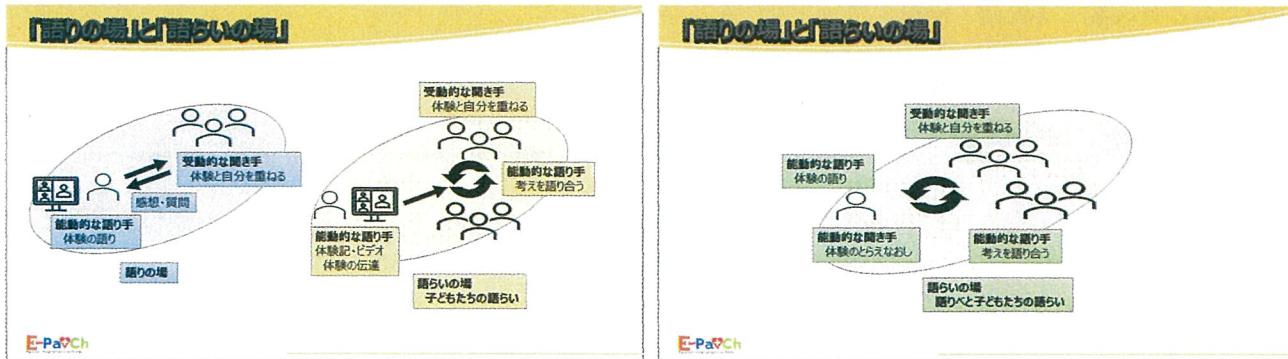
オンライン会議画面（ミーティング参加者数：26人）

- 「語らいの場」ではより深く話し合えるように、語りべ1人に対して一般参加者が5人から最大10人が適正規模である。それ以上の参加者となると、「語らい」ではなく講演となる。
- 「語らい」のルールは事前に説明し、参加者に周知する必要がある。
- 参加者は全員が短い自己紹介を行う。ただし、自分の日ごろの活動紹介を長々としない。参加者の背景を共有する場とする。
- ユース語りべの被災当時の体験は自己紹介や冒頭の語りの中で簡単に紹介する程度にとどめる。語らいが進む中で、ユース語りべが自発的に語るのは良いが、一般参加者から詳細を聞き取ろうとする行為はしない。
- 参加者は語りべの当時の思いやその後の活動、生き方に耳を傾ける。また、自分の考えを押し付けるのではなく、多様な考えを共有する姿勢を持つ。
- 全体の進行は主催者が務める。「語らいの場」の進行役は主催者が務めるか一般参加者の中から選び、事前に依頼して運営方法やルールを確認しておく。
- 語らいの場ではできるだけ自発的な語らいにゆだねる。話し合いが進みにくい時だけ、進行役が最小限のファシリテートを行う。
- 「語らいの場」の終了後、全体で共有する時間を設ける。人数が多くれば、各「語らいの場」の進行役が内容を報告し、数人の感想を求める。少人数であれば、報告の後、全員の意見、感想を求める。
- 「語らいの場」で話し合った内容を自分の所属する組織のニュースレターに紹介するときは、必ずその内容をユース語りべと主催者に知らせて、許可を得る。
- 個人のSNSでの発信は、「〇〇の会に参加した」程度の内容にとどめる。そこで話し合われた内容は他言しない。また、批判的な文章は発信しない。
- 参加者の許可を得て参加者のメールアドレスの共有などをを行い、その後の、参加者同士の交流につなげてもよい（例、参加者の学校や組織での勉強会にユース語りべを招く、等）。
- 対面であっても遠隔であっても、お茶やお菓子などを用意し、リラックスした雰囲気で語り合えるようにする。

5 いくつかの語りのスタイルと特徴

以下は、「語りの場」と「語らいの場」を図示したものである。学校での学習やシンポジウムでは以下の三つのスタイルが考えられる。

「講演」型



一般的な授業や講演、講義では、語りべは多くの聞き手の前で自分の体験を語る。語りべにとって自分の体験を語る行為は能動的である。言葉や映像を用いて自分の体験を具体的に語り、その時から今に至る生活の変化やそれに伴う思い、さらに聞き手に期待することも語りかける。語りべであると自己規定している大人の場合、体験と思いの整理ができており、体験と教訓、聞き手に期待することが明確になっている場合が多い。ユース語りべの場合はこの整理がまだまだ流動的で未完成の場合が多く、一方的な講演だけではなくそのあとの質疑で内容が深まるケースがある。

聞き手は受動的である。語りにただ耳を傾ける。唯一能動的になるのは、質疑応答の時間である。また、受動的に体験談を聞きながらも、語りべの体験に自分を重ね、自分ならどう行動しただろうと考える。特に、児童・生徒たちの作文にはこの傾向が顕著に表れる。「もし私なら…」という表現は頻繁にみられる。この段階では聞き手は受動的に受け止めた体験談やメッセージを能動的にとらえなおしていると考えられる。

「講演+話し合い」型

「講演+話し合い」型は「講演」型の発展形である。講演の後に、質疑応答の時間ではなく、聞き手同士での話し合いの場を設ける。参加人数が少なければ、語りべがそこに参加することも可能だが、学校での講演など多くの参加者がいる場合はそこまでは望めない。

語りべが能動的に語るのは「講演」型と同じであるが、その後、聞き手同士で能動的な話し合いが行われる。その中で聞き手は能動的に自分の考えを発信し、他者の意見を聞き多様な考えに触れることもできる。

学校では、全体での講演会だけで終わるのではなく、その後クラスあるいはグループで話し合いを持つてもらいたい。語りべの語りへの多面的理解につながり、同時に新しい疑問も生まれるだろう。それを語りべに伝えてやり取りを継続するといった教育活動をぜひ展開して欲しい。

講演会の代わりにビデオを見たり、手記を読んだりして、それを題材に話し合うスタイルも可能である。

「語らい」型

このスタイルでは、語りべと聞き手が少人数のグループを作り話し合いを行う。冒頭での語り部の体験談はできるだけ短時間で行い、語りべと聞き手の話し合いを行う。その場では、語りべの能動的な語りと聞き手の受動的な聞き取り、聞き手の能動的な発問と語りべの能動的な回答、あるいはその逆で語りべの能動的な発問と聞き手の能動的な回答、そして、聞き手同士の能動的な意見の交換が続く。

これら3つの型は、実施する場の性格（学校か講演会か小さな集会か、等）、参加者の数（大人数か少人数か）によって使い分けるとよい。学校では二つ目の「講演+話し合い」型が導入しやすい。少人数での集会が可能であれば、または多くの語りべの参加が見込めるのであれば、ぜひ「語らい」型にとりくんで欲しい。

最後に、学校教育は「価値」を押し付ける傾向がある。語りべの話を聞いて「防災活動を行いましょう」、「助け合いは素晴らしいですね」、「明日災害が起こって友達と会えなくなるかもしれないから、毎日を大切に行きましょう」、「普段できていることは普通ではなく幸せなことなんですよ」、「日常を大切にしましょう」といったまとめは防災教育ではよく聞くフレーズである。しかし、こういった表現は教師から子供たちに伝えられた瞬間に、記憶すべき知識に変換されてしまう。できれば、このような価値の押し付けは避けて、聞き手（学校の場合は子どもたち）の解釈にゆだねたい。まとめの時間は価値の押し付けの時間ではなく、多様性を共有したことを確認する時間、自分の課題を整理する時間としたい。

6 次年度以降の展望

ここまで示した通り、パイロット事業を通して「語らいの場」を持つことは、心のケアと防災教育という両面で、被災体験を持つ人にとっても持たない人にとってもポジティブな影響を与えることが分かってきた。しかし、重要なこととして、こうした「語らいの場」が設けられてこなかったことは、ユース語りべへのヒアリングや、パイロット事業に参加した神戸のユース語りべの発言からも明らかであった。そこで、次年度の展望として、1年目のパイロット事業からさらに発展させた「語らいの場」、つまり異なるコンセプトを持つ「語らいの場」を創出して、心のケアと防災教育という両面においてどのような効果をもたらしうるのか、そしてどのように被災地復興とこれから災害に直面するであろう地域における防災活動を推進する原動力になるのかをしっかりと明らかにしていきたい。

そこで、2年目の事業では「場所をつなぐ」「経験をつなぐ」「時間をつなぐ」という3つのコンセプトに基づく「語らいの場」を創出する。

「場所をつなぐ語らいの場」は、これまでに被災した地域で活動するユース語りべの「語らいの場」である。これまでの調査からも、ユース語りべは他地域で同様の活動を行う語りべとの交流はほとんどなかつたという。東日本大震災の被災地や阪神・淡路大震災の被災地など、被災地を超えてユース語りべが集う「語らいの場」としたい。宮城県仙台市を会場として対面で実施する予定である。

「経験をつなぐ語らいの場」では、東日本大震災を体験したユース語りべが、これから南海トラフ地震・津波が発生する高知県に赴き、高知県の児童・生徒や地域住民と語らう。高知県内で実施する。

「時間をつなぐ語らいの場」は、過去の大災害を知らない世代や住民が増えていく中で、年配の語りべとユース語りべ、そしてまだ被災していないけれども被災体験を次につなげようとする人々など、世代の異なる人々をつなぐ「語らいの場」である。これは、兵庫県神戸市で開催することを検討している。

3つのコンセプトを併せ持つ「場所・経験・時間をつなぐ」語らいの場を、総仕上げとして東京で開催する。最後に、オンライン事業報告会を開催し、語らいの場が持つ心のケア力と防災教育力と、被災地復興とこれから災害に直面するであろう地域における防災活動推進の効果を明らかにする。

これら語らいの場の創出にあたっては、1年目同様に専門家によるオンライン委員会を開催して、準備・検証しながら実施する。

7 おわりに

本事業はYahoo!基金の助成をいただいて実施しました。最後まで粘り強く「伴走」してくださったYahoo!基金に感謝します。

本事業に参加してくださった防災教育や心のケアの専門家、自ら語り部をしながら若者を支えている方々、そして何よりも、貴重な体験談だけではなく被災前、被災とその直後から現在までの生き方や考えを率直に語ってくださったユース語りべの皆さんに深く感謝いたします。本事業は、皆さんの夢である若者の「語らいの場」創出に向けて、2年目も続きます。ぜひ、お力を貸してくださいことをお願いします。



一般社団法人 子どものエンパワメントいわて
〒026-0034 岩手県釜石市中妻町3丁目14番26号